

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380699

研究課題名(和文)トランスナショナル・コミュニティの形成原理と都市コミュニティ研究の新たな位相

研究課題名(英文)A Theory of Transnational Community and the Current Phase of Research.

研究代表者

廣田 康生(Hirota, Yasuo)

専修大学・人間科学部・教授

研究者番号：60208890

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国境を超える人々の「場所形成」過程と新たなアイデンティティの出現に焦点を当てながら、沖家室(おきかむろ)のハワイ移住者、群馬県大泉町のブラジルタウン形成と日系人移動者のアイデンティティ、新宿コリアタウンでの「場所の獲得」の展開、現代ニューヨーク・イーストビレッジでの日本人移動者と場所形成に関するフィールドノートを「場所形成のエスノグラフィ」として呈示することで、日本人の「トランスナショナル・コミュニティ」研究の認識論とその都市社会学的意味を考察している。
本研究で筆者は、「場所形成」と「記憶の想像的利用」に注目して「トランスナショナル・コミュニティ」研究の意味を追究している。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to recognize the epistemology of transnationalism from below theory and to rethink some suggestions to the studies of Urban community studies in Japan. In order to accomplish these purposes, We took up some cases of Japanese transmigrants. These cases contain a historic studies of okikamuro Islanders who moved to Hawaii in Meiji era, the politics of place-making in Oizumi-town in Gumma prefecture, the politics of place-making at Korea town in Tokyo, and Japanese Migrants at East Village in New York.
In these researches, We reconfirmed the importance of agency-oriented theory and the methodology of place-making processes focussing on the the imaginative uses of memories. We recognized an imaginative Identity as a current form of migrant's Identity. As a result, We also preseted this forme of identity as a multicultural urban communities(The result of this research is already published as a book titled Transnational Community, Herbest Publishers, 2016).

研究分野：社会学

キーワード：トランスナショナルコミュニティ 下からのトランスナショナリズム 場所形成 場所の政治 想像的アイデンティティ 記憶の想像的利用 日常の実践 都市エスニシティ論

1. 研究開始当初の背景

グローバル化は、都市社会学の伝統的テーマである、都市的世界における差異や異質性の問題を新たな位相において呈示している。呈示されている差異や異質性のなかでわれわれはどのような問題に直面しているのか。ここでは我々個々人のグローバル化社会を生きる「主体」としての立場から、通常のグローバル化論とは異なる認識論的立場も必要となる。差異や異質性のなかでしかし共に異質な存在同士が結び合う契機を探しつつ、我々はどのような主体として生きることを要請されているのか。

本研究における主概念としての「トランスナショナル・コミュニティ」そしてこうした概念を支える「トランスナショナリズム論」とは、こうした現実的背景及び研究的背景の下で生れてきたものであり、それは、多文化・多民族化する都市コミュニティ研究にとって緊急に要請される課題である。

2. 研究の目的

グローバル化の中で問題になる差異や異質性とは何か。差異や異質性の中に身をおくことはどのような痛みや可能性そして強さを必要とするのか、我々はここでどのような主体として生きるのか、そしてどのように自らの場所をつくるのか。さらにこうした個々の実践は都市社会学的にはどのようなテーマとして展開しうるのか。これが、都市エスニシティ論の立場から「トランスナショナル・コミュニティ」を研究する目的である。

3. 研究の方法

上記の研究目的、背景のなかで、本研究では、第一に、日本人の「トランスナショナル・コミュニティ」実践に関するエスノグラフィックな研究を行い、その研究営為の過程で考えた「トランスナショナル・コミュニティ」研究の認識論、特に「下からのトランスナショナル・コミュニティ」に底流する思想、認識論を再考する。そして最後に、「トランスナショナル・コミュニティ」研究の、都市社会学における位置づけを図り、その意味を考える。

本研究で選んだエスノグラフィックな事例研究とは、第一に、明治、大正、昭和の初期に、山口県沖家室(おきかむろ)島からハワイに移住した日本人移民の移動とコミュニティ形成の歴史を「初期トランスナショナリズム」という観点から再考し、その意味を考えた事例、第二に、群馬県大泉町における帰還移民と受入住民との間の、ブラジルタウン(インターナショナル・タウン)形成に絡む衝突、葛藤、交渉の過程、第三に新宿コリアタウンにおける「場所の意味付け」をめぐる衝突と葛藤、推移空間化と「共生」の過程、そしてニューヨークのイーストビレッジの日本人町に生きる人のアイデンティティのかたちに関するものであり、特に、「結節

点」から見えてくる移動者の実践を描くという方法を取っている。

4. 研究成果

本研究の成果物として、筆者らは、すでに広田康生・藤原法子,2016,『トランスナショナル・コミュニティ 場所形成とアイデンティティの都市社会学』ハーベスト社、として2016年3月に予算内で出版したが、この成果物の内容に沿いつつ、研究成果について整理していきたい。

研究成果の第一は、「トランスナショナル・コミュニティ」研究を支える「下からのトランスナショナリズム論」の認識論を都市社会学の立場から明確に示すことができた点である。

上記の研究成果物においては、第一部第一章「認識論及び方法論」としてまとめたが、特に本研究では、その認識論の特徴として、1)周縁性の認識、2)行為主体志向の研究枠組み、3)結節点を介した越境空間として実在性、4)場所形成と記憶の想像的利用への関心、として定式化できた点が特徴的である。

1)周縁性の認識とは、次のようなことである。すなわち、移動実践そのもの、当該社会の既存の制度的世界にある種の亀裂をもたらす。境界性の出現であるが、同時にこの中で既存の制度が作りなおされる契機を生み出す。移動実践のなかにある諸個人は相互の異質性認識にもとづくアイデンティティの捉え直しに直面する。その中で移動者と彼らに共振する人々は、それぞれのアイデンティティの複数性、多数性に気づき、自らの異質性にも気づく。「トランスナショナル・コミュニティ」特に「下からのトランスナショナリズム論」に立つということは、中心からの目というよりは周辺から既存の制度的仕組みや価値観の課題性に気づくことを意味する。

2)「行為主体」志向の研究枠組みとは、「エージェンシー志向」の研究枠組みということであるが、個の立場では、移動者個人を、「行為を引き起こす条件としてのコミュニケーション能力」を有し、人と人とを媒介する(=代理する)個人としてみるということの意味する。これまで個人に焦点をあわせからの日常の実践やそれを支えるエスニック・ネットワークの意味をエージェンシーとしての移動者個人の何らかの共同性を求める実践とみること、共生への新たな理論的視界が開ける。

3)結節点を繋ぐ具体的な空間として「トランスナショナル・コミュニティ」を捉えることは、抽象的な空間としてではなく、人と人とが衝突、葛藤、交渉を行う現実のコミュニティとしてエスノグラフィックな研究が可能になることを意味する。こうした認識論的立場があって初めて、次の「場所形成」と「記憶の想像的利用」への

着目が可能になる。

4) 場所形成と記憶の想像的利用とは、具体的な「トランスナショナル・コミュニティ」形成の中で生じる場所の意味付けと獲得をめぐる衝突は必須である。それは、事例として取り上げた群馬県大泉町や新宿コリアタウンにおいても顕著である。本研究では、行為者志向的な研究を軸に、こうした場所形成の問題を、資本のグローバル化の影響というグランドナラティブに投げ込むことなく、どのように「場所形成」実践がぶつかり合うのかという観点からみるために、「記憶の想像的な利用」に着目した点は意義がある。それによって、行為主体の積極的な側面を描くことができ、そして本研究の最も重要な成果として、こうした実践が時に閉鎖的、同質的とみなされる日本人のトランスナショナル実践を描き出すことにつながった。

研究成果の第二点として筆者は、日本人のトランスナショナリズムの諸事例をエスノグラフィックなかたちで都市社会学の分野から描く試みをしたことと、さらにこの試みを書籍のかたちで出版できたことを挙げたい。

トランスナショナリズム論については、近年幾つかの研究がなされているが、場所形成、コミュニティ形成という観点からのエスノグラフィ はまだまだ少ないのが現状である。特に、本書の第二部は「場所形成のエスノグラフィ 」として6本のフィールドノートのエスノグラフィックに編集した。ちなみに、第二部の章立てのみ記載しておく。第二部第二章「越境の都市的世界と初期トランスナショナリズム」、第三章「移民宿からみた初期トランスナショナリズム」、第四章「帰還移民たちの場所形成」、第五章「場所とアイデンティティ」、第六章「推移する空間と場所形成 新宿コリアタウンでの場所形成の衝突と交渉」、第七章「補論：場所形成とアイデンティティ ニューヨーク・イーストビレッジにて」である。

第二章と第三章では、「初期トランスナショナリズム」という観点から、過去の移民経験を解釈し直す試みをしたが、この点も研究成果の一つである。

「初期トランスナショナリズム論」とは、トランスナショナリズム論における、方法論的な実験であり、過去の移民の移民実践や「場所形成」を、トランスナショナリズム論の観点 すなわち、初めから永住を目的にした移動というよりは、繰り返される移動が作り出す「越境する空間」の出現過程として人々の移動とコミュニティ形成として捉えようとする試みであるが、現在では移動が途絶えたあとで、あるいは定着したあとでも、「トランスナショナル・コミュニティ」は維持形成されるのか、という問題提起を検討するために行われて

いる。筆者は、「記憶の想像的利用」によって、出発点のコミュニティとは異なるものの、定着点の特徴も取り入れた「トランスナショナル・コミュニティ」が形成されているという事実を明らかにするために、本章を設けた。第三章の「移民宿」は、「初期トランスナショナリズム」という観点からみると、移民、移動のための重要な「結節点」であり、この存在と機能、役割について社会学の論文という形で報告されたのは大変珍しい。その意味でも今後の研究の礎石になる。

第四章と第五章では、群馬県大泉町での日系ブラジル人と日本人住民との葛藤と街づくりの過程を場所形成、場所の政治という観点から描いている。この点も、都市エスニシティ研究の中では珍しいのではないかと、と思われる。

第六章は、新宿コリアタウンでの、ムスリム系住民やコリアンの人々の「場所への意味付け」と住民との間のそれとの葛藤を描いている。推移空間化する中で日本人住民と移動者との間での「領域化」について描いた点は重要である。共生の位相が変化しつつある点を指摘した点は重要である。

第七章は、いわゆるはざまのアイデンティティから自らの特徴を生かすかたちで作り出す「想像的アイデンティティ」についてインタビュー記録のなかから問題提起した。これは、現在の国境を越えるひとびとのアイデンティティの特徴として問題提起した。

第三部では、こうした研究の意味を、都市社会学特に都市的世界における都市コミュニティ論の展開過程に結びつけて論じた点が成果である。

最後に、都市的世界における「トランスナショナル・コミュニティ」の編成原理とそれを担う「主体」に関する研究の今後の展望についても述べておきたい。

- 1) 当該社会の統合の圧力のなかで「行為主体」としての移動者はますます「場所形成」の実践を「日常実践」と「領域化」の実践を組み合わせながら行うようになっていく。今回の研究では「はざまのアイデンティティ」だけではなく、「想像的アイデンティティ」を持つ主体の出現という研究成果を得たが、われわれは、こうした実践の在り方について「行為主体志向の研究」の認識論や方法論に関する一層の基礎理論的な研究を補強していく必要がある。この研究課程では、邦文文献の検討に限らず、欧米の基礎的な文献の翻訳活動も必要になるかもしれない。
- 2) 彼らの場所形成は、ますます開放的で必ずしも居住の近接性にもとづかない社会的凝集としても成立し出している。例えば、新宿のいわゆる「イスラム・スポット」に

集まるムスリム住民の凝集は、その典型であるし、ニューヨーク・イーストビレッジにおける日本人住民のアイデンティティ形成の問題も重要である。それは、今後の海外日本人の「行為主体としての個と共同性」研究のテーマとしてますます必要になってくるのではないかと、という展望を得た。本研究ではせっかくその研究が端緒だったので、今後、一層深い事例研究を都市社会学の観点からも実施したい。この研究は、本研究から更に追究を課された今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

廣田康生「推移する新宿コリアンタウンにおける場所形成の諸相」『専修人間科学論集』第6巻第2号,2016,pp.43-61.査読有

廣田康生「奥田道大 モノグラフのなかに都市社会学の理論を求めて」『社会と調査』社会調査協会, No.16, 2016, p.89 査読有

Hirota, Yasuo. Ethnic Community Studies in Japan: Current Topics and a Conceptual Framework.
<http://jarcs.sakura.ne.jp/jarcs.en/papers/files/hirota.pdf>(地域社会学学会 HP 英語版 2016) 査読有

藤原法子「日本人性の重なりと場所 ニューヨークのジャパニーズ・コミュニティ」『専修大学人間科学論集』第6巻第2号,2016,pp.63-72. 廣田康生「書評 新原道信編『境界領域のフィールドワーク』『地域社会学学会年報』」第27集,ハーベスト社,2015,pp.147-148.査読有

廣田康生「書評 新原道信編『境界領域のフィールドワーク』『地域社会学学会年報』」第27集,ハーベスト社,2015,pp.147-148.査読有

藤原法子「越境する場所とアイデンティティ 群馬県大泉町の移民 1.5 世代の場所形成」『専修大学社会科学研究所 月報』No.599,2013.査読有.

廣田康生・藤原法子『トランスナショナル・コミュニティ 場所形成とアイデンティティの都市社会学』ハーベスト社,2016,全 268 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

廣田康生 (HIROTA, Yasuo)
専修大学・人間科学部・教授
研究者番号: 60208890

(2) 研究分担者

藤原法子 (FUJIWARA, Noriko)
専修大学・人間科学部・准教授
研究者番号: 60573300

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 1 件)